

『ベジタブル・カフェ』 第1章

杉山 めぐみ 明久実

そんな無茶な！

リストを見た率直な佳奈の感想だった。

なぜなら、そこに書かれていたのは

『卵を使わないトロトロのオムレツ』

『乳製品を使わない、とろけるチーズたっぷりのピザ』

『卵もミルクも使わないカスタードクリーム』

『油を使わないジューシーなフライ』

エトセトラ、エトセトラ……。

「これを私が作るんですか？」

「やっぱり、無理かしら？」

「無理に決まっています。それに、美味しいオムレツなら普通に卵を使えばいいじゃないですか？野菜料理とは聞いていましたけど……これはちょっと」

「普通そう思うわよね？やっぱり……」

憧れの女性、^{むろおみさと}室尾美里から手を貸してあげて欲しいと言われ、意を決してやってきたものの、いくら料理好きで残り物料理に自信のある^{かな}佳奈でも、このオーダーは考えるまでもなく無理だと思った。

佳奈は、つい1時間ほど前、ここのマンションに到着してから、面食らうことばかりだった。

地図を頼りに初めてやってきた^{さほ}沙歩の自宅兼オフィスは、都心のどまん中にあるタワー型の高層マンションで、普通の中小企業に勤めているただのOLの佳奈にとっては別世界だ。マンションなのに、入り口にはホテルのようなフロントがあって、名前と行き先を聞かれた。

フロントから沙歩の部屋に確認の電話が入られ、佳奈の来訪が認められた後カードキーが手渡された。

「エレベーターにこのキーをお使いくださいませ。お帰りの際にそちらのボックスにカードキーはご返却ください」

制服を着たフロントの女性からホテルのルームキーのようなカードキーを渡され、佳奈は首をかしげた。

豪勢に花が活けてある大きな花瓶の前を通りエレベーターホールに入ると、ちょうど空のエレベーターが一基、扉を開けて佳奈を待っている。

中に入って見て、渡されたカードキーの意味がやっと分かった。

行き先階数を押すパネルの一番下に、カードキーの差込口があり、キーを挿さないとエレベーターは作動しない仕組みになっていた。

普段セキュリティーとは無縁な生活をして、ちょっと前に知人のマンションで初めてオー

トロックに遭遇したばかりの佳奈にとっては、かなりのカルチャーショックだった。キーを差し込まれたエレベーターは、静かに扉を閉じたかと思うと、最初に小さく振動しただけで佳奈が指示した20階まで、あっという間に移動した。

普段使っている会社のエレベーターとは大違いだ。

おそらく、今の時間では6階くらいまでしか到着できない。

閉まる時と同じようにかすかな音を立て扉が開くと、この階のエレベーターホールでも、きれいな花が、佳奈を迎えた。

足元にはまるでホテルの廊下のように絨毯が敷き詰めてある。

「こんなマンションにオフィスがあるなんて、一体どんな仕事をしている人なんだろう？」おのぼりさんのようにあたりを見回しつつ、柔らかい絨毯の感触をバーゲンで買った靴の底で感じながら、部屋番号を順に見ていく。

2011、2010・・・。

「2006号室、ここだわ」

ちょっとドキドキしながら、チャイムを鳴らした。

すると、鳴らした途端というくらいのタイミングでドアが開いて佳奈を驚かせた。

ちょうど先客が帰るところだったらしい。

このマンションに見事に似合っている長身の男性が、大きな荷物を抱えて玄関を出て行くところだった。

その男性が、佳奈に軽く会釈をして颯爽と立ち去った後には、マンションとは思えないほど広い玄関ホールの床の上に、ここの主である門泉沙歩がラフなスタイルで立っていた。きれいに磨かれた白い大理石の床に立つすらりと背の高い沙歩は、佳奈よりも若く見えた。電話で挨拶しただけの初対面の沙歩が、ファッションモデルのようにきれいな女性だったので、佳奈は思わず息を飲み、危うく挨拶するのを忘れそうだった。

「はじめまして、美里さんから紹介されてうかがいました柚邑佳奈です」

「こちらこそはじめまして、門泉です。どうぞ、上がって」

沙歩と部屋の美しさに気後れしながらも、用意されたスリッパに履き替えて、既に奥へ行ってしまった沙歩を急いで追いかけた。

部屋に入ると、その豪華さにさらに圧倒させられた。

淡い色合いでまとめられた広いリビング。

そのリビングの真ん中には柔らかそうなシャギーのラグが敷かれ、テレビや雑誌でしかお目にかかったことがないような、大きくて真っ白なソファにガラスのテーブルがゆったりと置かれている。

佳奈の部屋には、このセット一つ分だって入りそうにない。

壁際に大きな液晶モニターが置かれていて、その周りにあるおしゃれなデザインのリビングボードは、以前インテリア雑誌で見た有名なデザイナーのものだと思う。

そして、南側一面の大きな窓からは、都会の真ん中らしい風景が一望できる。

さぞや夜景はきれいだろう。

「お好きなおところにどうぞ、今、お茶を持ってくるわ」

沙歩は、そう言うと佳奈を一人残し、キッチンへ姿を消した。

そう言われても全く落ち着かない佳奈は、恐る恐るソファの端に借りてきた猫のように小さくなって座った。

待たされているほんの数分が、佳奈にとってはとても長い時間を感じる。

自分なんかがここに来て何の役に立つのだろうか？と思い、来たことを後悔し始めるには十分な長さだ。

帰りたい、と思う気持ちに歯止めをかけるタイミングで沙歩がお茶を持って戻ってきた。

乳白色のアクリルのトレーに乗ったマイセンのティーセットを見て、佳奈の口からため息が漏れた。

純白のこのシリーズは以前から佳奈の憧れのセットで、マイセンのコーナーで見かけるたびに、いつかはこのセットを手に入れたいと思っていたものと同じだった。

お茶と一緒に、高級そうなチョコレートが一粒乗った小さなお皿を置いたところで沙歩が口を開いた。

「改めて、ようこそ私のオフィスへ。柚邑佳奈さんでしたよね」

「はい、そうです。先週お電話いたしましたように、美里さんからお料理でお手伝いできることがあります。なのでこちらへうかがうようになって……」

「そうなのよ。私、店を作るのは上手なだけ、お料理は本当にダメなの。ああ、美里から私のことって聞いているんでしょ？」

佳奈は小さく首を振った。

美里からは何も聞いていない。

「えっ？何も聞いていないの？じゃあ、私が何をしたいくて、何に困っているかも、何も知らないの？」

「ええ、美里さんからは、私の残り物料理の腕が活かせると思うって言われただけで、他のことは一切教えていただいてないんです」

「ほんとにそれだけ？」

「ええ、ほんとにそれだけです」

「よく、それだけでここへ来てくれたわね。まああの美里の紹介ですものね、誰でも魔法にかかっちゃうわよね。私が今からしたい事も、美里マジックのおかげですもの」

「美里マジック？」

「そう、美里マジック。私は、ショッププロデューサーという仕事をしているの。色々なお店の企画を立てて、いかにそのお店をはやらさせるか……お店の立地や外装、内装、扱う商品、スタッフの教育、宣伝、広報……様々な角度からコーディネートしていくの。今まで色々なお店を手がけてきたわ」

沙歩の口から出た店の名前は、いかに世間に疎い佳奈でさえも知っている話題になった店

ばかり。

確かにそういう仕事ならこんなオフィスで仕事出来るわけだと、佳奈の疑問は少しだけ解けた。

「だけど、美里の店を作ってからどうしても自分の仕事に納得がいかなくなってしまうと、ついひと月前に、自分のカフェを作る計画をスタートさせたの。だけどここで大問題、私がどうしても欲しいメニューは、誰に聞いても出来ないって言われるの」

美里の店を作ったのもこの人なんだ。

あらためて佳奈はびっくりした。

佳奈にとって、5ヶ月前の美里との出会いがなければ、この数ヶ月は暗くて辛いものだったにちがいない。

美里の店というのは、都心からちょっと外れた大きな公園の一区画にあるシャンプー専門の店。

シャンプー専門と言っても販売しているわけではなく、1日4人限定でシャンプーをしてくれる風変わった店だ。

完全予約制で、最近では2ヶ月先まで予約はびっしり詰まっている。

失恋してひどく落ち込んでいた佳奈に、きっと気分が変わると友人が勧めたので、心の痛みがシャンプーなんかで癒せるわけないと思いつつも、ちょっとした気分転換程度のつもりで訪れた。

だけど、森のような公園の景色を眺め、美里と雑談をしながらシャンプーしてもらったら、びっくりするくらい気持ちが軽くなって、別れた彼のことでいっぱいだった頭の中まできれいに洗い流せた。

たった一度のシャンプーとは思えない癒しに、自分の予約を譲ってくれた友人に心から感謝した。

それ以降毎月一回自分へのご褒美のつもりで、会社を休んでまでシャンプーに通っている。そして訪れるたびに色々な気付きを得て、心まで癒されるので、わずかな期間の間に、美里も美里の店も、佳奈にとってはかけがいのないものになっていった。

人生の転換期のタイミングと感じた佳奈は、どうしても美里と話をしてみたくなり、先月の終わりに、彼女の店に行った時思い切って訊ねてみた。

断られることを覚悟していたのに、ちゃんと時間を取ってくれ、佳奈が知りたいと思っていたことの原因をきちんと話してくれた。

美里は、店を始めてから人に話すのは初めてと言いながら、なぜ、こんな場所でこんな店を始めることになったのか、美里の人生にとっても辛い時期があった事を包み隠さず打ち明けてくれた。

苦難を乗り越えて、今の店を始めることができたいきさつを聞き、ご縁のつながりの大切

さと、チャンスをつかみ取る瞬間を教えてもらって、話の内容と美里の人柄に心から感動した。

その中で、店を作るときに参加したアーティストの話が出てきたが、その内の一人が、目の前にいる沙歩だったということだ。

こんなに若くてきれいな人があの店の作り手だなんて……。

今では、佳奈にとっては雲の上のような存在に感じる美里。

沙歩は、その素敵な美里の店作りに関わった人だ。

そんな人が新しいお店を作るというのに、私なんか役に立つはずがない。

ますます、佳奈は自分が場違いなところに来てしまったと痛感した。

ところが、どう見ても普通のOLにしか見えない佳奈に対して、沙歩は期待しているらしい。

飾り気のない性格がそのまま表れているともいえるが、通常の仕事仲間と全く同じように接している。

料理がまるで出来ない沙歩にとって、美味しい料理が作れるということ自体が尊敬に値するのかもしれない。

しかし、そんな沙歩が出してきたリストは、佳奈にとっては理解しがたいメニューの羅列だった。

「やっぱり、卵なしオムレツは無理か……」

あっさり無理と決め付けた佳奈の顔を見ながら、沙歩はそうつぶやいたが、内心ではまだあきらめていなかった。

沙歩の考えがまるで分かっていない佳奈は、もう一度リストを見たが、卵、乳製品、油を避けているように見えるそのメニューの真意は、やはりよくわからない。

「これってアレルギー対応メニューかなにかですか？」

唯一思いついた事を口に出してみたが、沙歩からは意外な答えが返ってきた。

「ううん、違うの。全て植物だけで作ったメニューにしたいのよ。世界に一つもない動物性食材フリーなのに、植物性とは思えないとんでもなく美味しい料理を出す店。そんな店が、どうしても欲しいの。普通の美味しい野菜料理はたくさんあるのよ。知り合いのシェフに作ってもらったんだけど……だけどね、それだけじゃどこか物足りないのよね。私がねらっているターゲット層には、きっと全然響かない……」

「ねらっているターゲットですか？」

「たぶん、いっぺんに話してもわかってもらいづらいと思うから、順番に話すわね。ああ、それより私、今すごくおなかすいているの。さっき帰った人と朝からずっと打ち合わせしてたんで、今日はまだこのチョコレート以外何も食べていないのよ。外に食べに行くか、何かデリバリーを頼んで食べたいんだけど、佳奈さん食事は？」

「私も、お昼はまだ食べていませんけど、良かったら何か作りましょうか？」

「それは、あなたの腕を見せてもらえるので嬉しいけど、残念ながら我が家の冷蔵庫には料理ができるほど食材は入っていないわ」

「我が家って事は、ここにお住まいなんですよ？・・・なら少しくらいは食材ありませんか？少しでもあればたぶん作れます。見てもいいですか？」

半ば強引にキッチンに入り込んだ佳奈は、大きくて立派な冷蔵庫を開けて愕然とした。

入っていたのは、お菓子と飲み物と調味料。

野菜室の引き出しを開けても、白ワインが何本か横たわっていて、その端っこにしなび始めたシイタケとシメジが申し訳なさそうに転がっている。

一番下のフリーザーにも、アイスクリームと氷しか入っていなかった。

「ね、何も無いでしょ？そのきのこも先週もらってきたんだけど、どうしたらいいかわからなくてそのままにしてあるの」

佳奈は呆れて物が言えなかった。

こんなに素敵なところに住んでいながら、この人は何を食べて生きているんだろう？

料理好きな佳奈から見れば、広々とした使いやすそうなシステムキッチンがお茶を入れるだけに使われているのがあまりにもかわいそうに見えた。

「あの、パスタとかはないですか？」

「ああ、スパゲティなら確かこの棚にあったと思うわ」

そう言って、食器棚の下の方の扉を開けたら、封を切っていないイタリア製のスパゲティと、缶詰が入っていた。

結局、キッチンを隅々探して、お菓子ではない食材は、スパゲティ、シイタケ、シメジ、コーン、グリーンピース、そして調味料。

「スパゲティがあるなら大丈夫。冷蔵庫に入っている飲みかけの白ワイン、少し使ってもいいですか？」

「ええ、どうぞ。それ、昨日開けたけどあまり口に合わなくて飲みきれなかったのよ。だからどうしようかと思っていたの、好きなだけ使って。道具は一応一通り揃っているはずだし、食器も棚から好きなものを使って」

「ありがとうございます。20分ください。ノンオイルで美味しいパスタを作ります」

佳奈はそう言って、新品同様の大きな鍋でお湯を沸かし始め、テフロン加工が施してあるフライパンをレンジにかけた。

ボウルの中でさっと振り洗いして石突きを取ったきのこ類を、温まったフライパンにいきなり放り込み、白ワインをたっぷり振りかけブイオンを崩して加えた。

道具も食器も一流のものが揃っていて、きちんと整理されているので、初めて使うキッチンの割には作業しやすかった。

佳奈は、特別目立つところのない平均的日本人OLのサンプルのような女性だけど、料理だけはちょっと自信があった。

ただ、逆を返せば、それ以外特筆に価することがないくらいに平凡だ。

今年 30 歳になったばかりの佳奈は、年齢相応の印象で、美人とは言いがたい十人並みの顔立ち。

身長も、日本人女性の平均とピッタリ同じ 158cm。

30 年間の人生も履歴書に書いてある行数でほとんど語れてしまう。

地方の田舎町で育ち、高校まで親元で過ごし、大学進学を機に東京に出てきて、仕送りとバイトで 4 年間の学生生活を送り、卒業後は内定をもらった中で一番給料の良さそうだった食品会社の事務職に納まった。

住んでいるのもギリギリ 23 区内に位置する住宅地。

標準的な 1K のマンションで一人暮らしをしている。

特別な夢もなく、毎日同じ事を繰り返し、休みの日に友人と食事や買い物に行くことくらいが楽しみという、面白みにかける暮らしぶり。

ちょっと評価できることがあるといえば、アルバイトは 4 年間ずっと同じところに勤めていたし、会社も入社して丸 8 年。

コツコツと同じことが出来るということだ。

彼氏も 10 年間、ずっと一人だけ。

大学時代からずっと付き合い続け、佳奈としては結婚するつもりだった。

なのに 5 ヶ月前、突然その彼氏に振られて、佳奈は自分の人生が終わったようなショックを受けた。

佳奈の人生と人柄は、このくらい語れば大まかに理解できるくらいシンプルだ。

そんな佳奈の唯一の趣味であり特技が、料理だった。

特に、冷蔵庫にある残り物や、ちょっとした材料で手早くオリジナル料理を作ることにかけてはセンスがある。

と言っても、別れた彼氏も取り立てて褒めたことがなかったので、自分の料理がどれほどものかちゃんと認識していなかった。

ただ、食べるのも作るのも好きだから料理しているに過ぎない。

とはいえ、さすがに残り物料理のプロを自認するだけあって、宣言どおりの 20 分経った時には、美味しそうな香りが辺り一面に広がった。

台布巾でさっと拭き清めたダイニングテーブルには、ウェッジウッドのスクウェアプレートの上に盛り付けられて、つややかに輝く『きのことグリーンピースのパスタ』、それに小さなカップに注がれた『コーンのスープ』が並べられた。

「信じられない、このわずかな時間と食材で、よくこんなメニューが作れるわね」

「それは、食べてみてからおっしゃってください。お口に合うかどうかは別ですから」

そうは言ったものの、佳奈には自信はあった。

佳奈の特技は、作る前から食材や調味料の組み合わせを頭の中でイメージできること。

今まで外れたことはない。

「何これ！すごく美味しいわよ。ウチにあった材料だけでどうしてこんな風に作れるの？しかも、ノンオイルで作ってくれたのよね？」

「お口に合ってよかったです。ノンオイルと言っても、冷蔵庫にブイヨンがあったのと、パスタのところに練りゴマの使いきりパックがあったので、使わせてもらいました。ですから厳密には少し油分はあります」

「そんなもの、あったかしら？」

「ええ、ちゃんと賞味期限前のものがありましたよ」

「それ、たぶんもらい物だわ。たまに、お菓子と飲み物以外のものをくださる方がいるの。たいていすごく上等で手に入れにくいものとか、発売前のサンプルとか……、もっとも私の事をよく知っている人は、そのまま食べられるものしかくださらないんだけどね。このきのこもそう、オーガニックの貴重品なのに、料理が出来る方に譲りそこなっちゃったのよ。捨てずにすんでよかったわ。ああ、本当にこれ美味しいわ。きのこことグリーンピースだけなのに、あまりさっぱりしすぎてなくて食べ応えがあるわ。これって何が入っているの？」

「ああ、それは、隠し味にお味噌を入れているのと、練りゴマのおかげです。白ワインをソースのベースにしたので酸味が爽やかさを出していて、それでいてちょっとこってりした感じが出せるかなって思って……」

「すごい、お味噌と白ワインなんて良く考え付くわね。本当に美味しいわ。このスープも塩加減がすごくいい。ここに温野菜とバケットをそえて、デザートとドリンクを足したら2000円のメニューの出来上がりって感じ。このままでも十分お店に出せる見た目と味よ。残り物料理だなんて絶対思わないわ。なんで料理の道に進まなかったの？センスいいわよ」お世辞ではなく、本当に見た目も味も下手な店で食べるよりもずっとよい出来だった。

「見た目がいいのは、お皿のおかげです。残念ながら我が家ではこうはいきません。自分でも美味しいとは思いますが、仕事に出来るほどではないですよ」

これは佳奈の本心だった。

実際にどんなに料理が上手に出来ても、食器とのバランスで、美味しそうに見えるかどうかは大きく左右される。

見た目も味のうち。

佳奈はいつもそう思っていた。

自分の料理をこんな上等なお皿に盛るのは実は初めてのこと。

それに、ちょっと家庭での料理が上手に出来ると言っても、料理で身を立てることが出来るかどうかなんて考えたこともなかった。

しかし、沙歩は、佳奈の作ったパスタをペロリと平らげ、佳奈の料理の腕と発想に大いに満足していた。

「美味しかったわ！ごちそうさま。あなたの作る料理、もっと食べてみたいわ。今度はちゃんと材料を用意するし、私の企画に賛同してもらえるようなら、ちゃんとギャランティ

をお支払いするわ」

「えっ、本当ですか？」

自分の料理がギャラをもらえるほどのものだと、にわかには信じられなかった。

「ええ、当然だわ。今の一品だけでもあなたのセンスはある程度分かるわよ。もちろん本当に売り物にするには、いくつかハードルはあるけど、試作品としては十分合格よ。お腹もいっぱいになったことだし、今日お話できるところまで状況をお話したいんだけどいいかしら？」

「もちろんです。お願いします」

佳奈にしてみれば、沙歩のような人に自分の料理を認めてもらえるだけでもすごいことだった。

それに、どんなプロジェクトかは聞かなければ分からないけど、自分が料理をすることでギャラがもらえるというだけでも、佳奈は初めて彼氏ができた時くらいにドキドキワクワクし始めた。

手早く片づけをして、食後のお茶を入れ、リビングのソファで沙歩のプランを聞く準備を整えた。

今回の仕事は人生に関わることなので、お互いのことを知っていた方が良いという沙歩の提案で、まず、自己紹介もかねてお互いのプロフィールを紹介しあった。

しかし聞いてみると、沙歩の人生は、佳奈とは似ても似つかなかった。

若く見えるが、実際には佳奈よりも4歳も年上の34歳。

168cmの長身で日本人離れした風貌なので、学生時代はモデルとして何度もスカウトされたらしい。

ところが、本人はマスコミや芸能界に全く興味がなく、全て断ってきたという。

沙歩の両親は親の代から東京生まれの東京育ち、今は夫婦揃ってアメリカ在住。

父親の事業の関係で、子ども時代から海外での生活をすることも多く、日本と海外を何往復もしている。

一人っ子の箱入り娘だったが、ある日突然、日本の大学に行きたいと言い出した沙歩は、ちょうどその頃、イギリスで生活していた両親と離れ、一人帰国した。

都内に実家があるにも関わらず、広すぎて面倒だし通学に不便だからという理由で、都心のマンションを親に買ってもらって一人暮らしを始めた。

そんな優雅な学生時代に、知人から頼まれたレストランのプランを遊び感覚で手伝ったことがきっかけで、ショッププロデューサーの道に入ることになった。

沙歩の奇抜でおしゃれなその店は大当たりし、世間に注目された。

そのおかげで、その店の成功から間をおかずに、他の店のオーナーからも依頼が飛び込んでくることになった。

もともとのカンの良さと海外生活で培ったセンスがあいまって、沙歩の手がけた店はことごとく当たり、大学を卒業する頃には、既に普通のサラリーマンの月収をはるかに超えるほどの収入を手にする事が出来た。

卒業後もそのまま順調に仕事も収入も増え続け、今では一般的なOLの年収分を毎月稼ぎ出せるくらいまでになった。

収入が多い分、ライフスタイルは思い通りにできる。

住みたいところに住み、食べたいものを食べ、着たい服を着て、何の不自由もない。

自分の仕事に誇りを持ち、学生時代から数えるとほぼ10年以上、仕事にも仲間にも恵まれてきたと自分では思っていた。

ところが、仕事で知り合ったニューヨーク在住の日本人アーティストから美里に紹介されたのが2年ほど前。

美里の店を作り、美里の店で美里に髪を洗ってもらうようになってから、自分の人生にも仕事にも迷いはなかった沙歩が、自分の人生にむなしさを感じるようになってしまった。

「変でしょ？たぶん一般的な生活している人からみたら贅沢な悩みで、取り合っさえもらえないと自分でも思うもの」

「そうかもしれませんね。確かにうらやましい限りです。本当に門泉さんのような人は私の周りには全くいないです。雲の上の世界に感じます。でも、私も美里さんに髪を洗ってもらって、彼女とお話をするようになってから、ものの見方がどんどん変わってきたので、門泉さんのお気持ちが少し分かる気がします。自分がすごくちっぽけな存在に感じるんじゃないですか？」

「ああ、そう、そんな感じ。それより、私のことは沙歩って呼んで、私もあなたのことは佳奈って呼ばせてもらうから」

自分より年上だって事が、年齢を明かされた今でもまだピンとこなかった。

年下に見える沙歩からいきなり呼び捨てにされることに少しばかりの抵抗を感じながらも、沙歩のあけっぴろげな人柄にどんどん好感を持ち始めていたので、自分も呼び方を変えてみることにした。

「ちょっと大きさに聞こえるかもしれないけど、本当の意味で未来を作ることに繋がる仕事をしたくなったの」

「未来を作るんですか？確かに大きいですね」

「そうでしょ……。実はね、私は今までクライアントを喜ばせるために、世間の流行の先取りをして、人が集まる店作りを一番に考えながら仕事をしてきたの。だけど、美里の仕事は、まるきり違う。たった一人で、1日にたった4人のお客様の髪を洗うだけの一見地味な仕事なのに、すごいことが起きているのよ。彼女に関わると、人の気持ちがどんどん変わってきて、シャンプーという一つのキーワードから、環境のこと、自然のこと、自分のこと、家族のこと……。それぞれに考え直し始めているのよ。たった1本だけ、シャンプーを変えたことだけで、生活がどんどん変わってきて心が豊かになっていく。これ

ってすごいことだと思わない？」

「ええ、思います。私もこの5ヶ月で私なりにすごく変化しました。美里さんて、すごく自然体で、あの人の言葉って、すーっと心の中に溶け込んできて、日頃考えても見なかった色々な考え方の種を蒔いてくれる感じなんですよ」

「そうそう、そうなのよ。私の作った店はちゃんと流行っていて、クライアントに収益をもたらしている。たくさんの方が気に入ってくれて有名かもしれない。でも、ただ、それだけの気がしてきちゃったのよ。美里の店のお客様は、人数は少ないかもしれないけど、確実に幸せなもの考え方と暮らし方に向き合う人が誕生している。そうやって誕生した人は、その人の周りにも同じ考え方を自然にシェアしていくと思うの。これって未来を作っているって思えない？」

「なるほど、確かにそうですね。私も生活が少しずつ変わりましたよ。それに、美里さんに背中を押してもらえなければ、今日の沙歩さんとの出会いもないですし、料理が自分や友人以外の方の、口とお腹を満足させる役に立つ可能性なんて考えもしませんでした」

「ねっ、そうでしょ。私はね、美里みたいな仕事を料理でやりたいのよ」

「料理で、ですか？」

「そう、野菜のごはんで、世の中にハッピーなメッセージを届けたいの」

沙歩はそう言って満面の笑みを浮かべた。